

植田武夫さんと光子さんを送る

森 沢 正 昭 (臨海実験所)

昭和47年以来、臨海実験所の寄宿舎の管理運営を一手に引き受けてこられた植田武夫さんが定年退官されます。従って臨時雇用員として二人三脚で調理、清掃、寝具の整理などを助けてこられた、奥さんの光子さんも臨海実験所の住み慣れた官舎を離れることとなります。寄宿舎の管理運営というのは勤務時間があって無きがごときものです。朝食は8時なので、仕事の始まりは朝の6時頃から、そして夕食の終了は7時なので、食器洗い、その他の片づけが終わると9時頃になります。そのあいだに使用すみの寝具の片づけ、次の利用者への用意、各部屋の清掃、手洗い、シャワー室、風呂場の清掃、買い物、防犯防災の見回り、所内道路の整備、庭の芝刈りなど、まさしく多忙な毎日です。現在の臨海実験所の共同利用研究、大学院教育、臨海実習の利用者の年間の延べ人数は理学部をはじめ教養学部、農学部、資料館、海洋研、更には他大学、他研究機関を含めて10,000人を越えます。1年365日とすれば毎日30人近くの人々が利用していることになり、これを23年間続けられてこられたのは大変なことであったと思います。本当にありがとうございました。

全国には22の臨海臨湖実験所があり、それぞれ数人の教官、技官、事務官、大学院生、卒研究生が1つのコミュニティーを作っています。そこには理学部の三崎臨海実験所同様に本学ばかりでなく、他の大学、研究機関の教官、学生が、そして臨海実習の学生が入れ替わり立ち替わりやってきます。実を言うと、実験所の評価は技官、事務官の仕事ぶり与人柄によって決まると言って過言ではありません。特に寄宿舎の食事は、実験所の人々と、共同利用者からなるコミュニティーにとって一番大事なことです。西部劇でみられる幌

馬車隊やカウボーイの集団では食事係のおじさんが最も重要で、高い位置を占めているのとよく似ているわけです。従って、我々も利用者もこの辺の所が重大関心事であって、所長会議や学会の集まりなどでも各臨海臨湖実験所の寄宿舎の食事の話題がしばしば出るので。植田さんの食事は全国臨海臨湖実験所ナンバーワン、というのは揺るぎなく、異論のないところです。これはただ腕がよいというだけでなく、必ず、御飯は手ずからよそって手渡すと言うところまでの細かい心づかいがあるからなのですが、食べる側はそのことにあまり気がつかないようです。このような仕事が臨海実験所から消えていくことは寂しい限りです。これは定員削減という路線が業務内容に関わらず引かれていることから致し方ないことでありましょう。

少し閑静な自然の中で、食事が取り持つコミュニケーションから作られた研究教育の成果というのは、なにか競走だけから作られたものとは違う味があるように思われます。私が赴任して間もなく、ウニの発生学の泰斗である団勝磨先生に、先生はよい臨海実験所とはどういうところとお考えですかと問いましたら、しばらく考えて、「きみ、それは皆で1つの釜の飯を食う所だよ」と言われました。昔は全国各地にこのような研究教育の場がありました。しかし、冷たいもので、臨海臨湖実験所から温かい食事が奪われつつあります。今は皆仕出し弁当に変わってしまいました。植田さんは最後、又は最後に近い賄いの技官なのです。

このような伝統が、おそらく三崎を最後に消えていくのは寂しいことです。そればかりでなく臨海実験所の防災、防犯、整備を担当する人もいな

くなるわけです。そこで何とか食事だけは実験所に残せたらと考えております。数年前に実験研究棟が完成し、設備も充実して長期滞在の臨海実験所所属の学生、共同研究、実習、セミナー等の利用者が急激に増えております。従って運営面での費用の負担が多いので十分手当はできないのです

が、植田さんに非常勤で来ていただくことを考えております。それはともかく、今は、長年の激務を笑顔でつとめてこられた植田さん御夫妻に心からありがとうございますという気持ちでいっぱいです。これからも三崎の地で、臨海実験所とともに歩んでください。

